

土との出会い② (土粘土)

子どもの頃、遠い昔と言ったほうがいいのかもわからない。昭和真ただ中に幼少期を過ごしていた私の生活環境は今の時代からは考えられないものかもしれない。

小学校の低学年の頃、地域の宅地開発が進み近隣の森や林が切り崩された。田んぼも当然、どんどんと土が入れられ瞬く間に造成されていきました。めだかやたなご、ザリガニがとれた田や小川がなくなり、カブトムシやクワガタのとれる場所も消滅した。

開発が進む中で子ども達の遊び場も変化していった。森が切り崩され、土が掘り起こされた断面から粘土質の土がでてくる場所が点々と出てきた、子ども達の好奇心がその粘土質の土を遊びに取り入れられないわけはなかった。

本来は立ち入り禁止の場所ではあるが当時の大人(工事関係者)は寛大であり「怪我すんなよー」と声をかけるぐらいで遊ばせてくれた。



遊びは取り出した粘土で何かを作り出そうとするものでなく、土と戯れ時間が経過する程度のお遊びであった。

その場所に入出入りできる日には全身泥だらけで毎日帰宅していた。

昨今は汚れを嫌う傾向にあるのか土との出会う機会を削がれている傾向があります。

せめて幼児期には思う存分と土に触れる機会を作っておきたいと切に思っている。

或る研究者の論文に「保育施設に砂場はあるのに粘土場はない」

子ども達の過ごす施設環境には砂場は必須の環境であるが粘土(土粘土等)が思う存分行える場所がないと言う。

保育園に仮に粘土場を作ってみたら管理上、相当な労力があることがわかる。幼稚園や保育園の粘土と言えば、油粘土、時には小麦粉粘土をつくり遊ぶ、又決まりきった活動で粘土制作と題して紙粘土を使う程度である。その素材を有効に使っている園があるかもしれないが大方は遊びの一つのアイテム程度にしか考えていないところが多い、油粘土は雨の日の必須アイテムで室内では好都合な素材である。

子どもを管理しやすいように使われている素材になっている傾向があります。

ではなんで土粘土が普及しないのか? 幼児の遊びにおいて必要であるという認識がない、土粘土などの素材を積極的に保育の現場で取り入れていくには、その労力は大変であり、忙しい中で手間暇をかけなくてはならないものだと敬遠されている。むしろ眼中にはないと考えにも及ばない所が多い、当園はどうであろう、土粘土を取り上げている園の実践は知っていて、子どもにとって楽しい活動になることとわかっていても積極的に取り入れようという気持ちは起こらなかった。当然私も子どもにとって良いものかわかっていても保育現場で取り入れようとは思わなかった。

が、しかし「できない できない わからない」ではいつも思考停止状態である。子ども達と言えば「やりたい やりたい、学びたい」と毎日が思考全開で様々な学びをしている。それに付き合う(寄り添う)大人が思考停止で好奇心が薄れてはいけない。

そんなことで 前回のたよりで書き記した、「保育士の概念崩し」につながるのです。

美術家でもなく全くの素人でも好奇心と少々の知恵があれば子どもの持ち合わせている力と合わせ

「楽しい活動」が生み出されていきます。

子ども達のやりたいなを実現

おもしろいな たのしいな

夢中になれる環境をつくりたいな

と私の一存で 土粘土を保育に取り入れてみました。付き合ってくれる職員には感謝です。

でもなによりも子ども達の取り組んでいる(遊んでいる)姿をみて改めて子ども達の思いに寄り添い、生活の内容(保育内容)を作り出していくことの大切さを再認識する機会をいただきました。

さすがに土粘土の管理には労力を使います。適度な粘度にするための事前の準備(手でこねる作業)は老体にはこたえますが良い運動になります。



大人の都合や決まりきった概念が子ども達の夢中になれる瞬間(時間)を奪ってしまう。

身体で体験する、素材を通じて様々な思考がある。体験を通じての様々な認知がある 土粘土は大人(保育者)があれこれと言わなくとも自らが素材に触れ、遊ぶことができる。やり込んでいくと何百通り

もの遊び生まれくるだろう。継続は力なり、新たな創造を生み出してくる。素材や道具体験、柔軟な発想が既存の枠から抜け出し、新たな子ども達の姿を映し出してくれていると思っています。

(園長 廣部信隆)